津軽統一過程におけるアイヌ民族との戦い

蔦谷大輔
（県民生活文化課 県史編さんグループ非常勤嘱託員）

五所川原市飯詰の日蓮宗妙龍寺裏手にある飯詰城跡
（2011年４月27日　蔦谷大輔撮影）

周知のように、大浦（津軽）為信は、南部氏などとの間で熾烈な津軽「伐取」戦争を繰り広げた。弘前藩では、その過程は歴史書などの編纂物で詳述され、藩祖為信の事跡として顕彰された。しかし、そのような津軽統一史には表だって出てこない相手との戦いも、為信は経験していた。それは当時津軽に居住していたアイヌ民族との戦いである。

為信による津軽「伐取」戦争が繰り広げられた16世紀後半、大秋・村市（ともに西目屋村）・宮舘（弘前市）の城館では、「蝦夷荒」と称されるアイヌ民族との対立・抗争の危機に直面していたといわれる。この地域は、大浦氏譜代の家臣（大浦氏に代々仕えてきた家臣）の出身地、すなわち岩木川西岸および岩木山と岩木川に囲まれた地域と重なる。大浦氏がここに勢力を扶植しようとしたとき、両者の間に軋轢が生じたのであろう。

また、鰺ヶ沢の入り口に位置する中村（鰺ヶ沢町）でもアイヌ民族の蜂起が起こっており、1581（天正９）年３月に鎮圧されたと伝えられる。鰺ヶ沢は北方地域への通路として機能するなど交通の拠点であり、この蜂起鎮圧を通じて同地が確保されたことにより、大浦氏は日本海交易に進出するきっかけを得たといえよう。

さらに、大浦氏とアイヌ民族との戦いは津軽半島部でも起こっていた。為信は、1578（天正６）年の浪岡北畠氏滅亡後も、自身の下知に従順ではない飯詰（五所川原市）を攻略するために、飯詰の北側にある喜良市（五所川原市金木）からの掃討作戦を展開した。この作戦を実行するにあたって、為信は喜良市に居住するアイヌの酋長の八重と左助を懐柔しようと画策した。だが、彼らはこれに応じなかったために討ち取られた。結果的に為信の飯詰攻略は成功したものの、その過程でアイヌ民族との戦いを経なくてはならなかったのである。

以上のように、為信の津軽「伐取」戦争は、南部氏との戦いだけではなく、アイヌ民族との戦いも大きな比重を占めていた。ところが、冒頭に述べたように、こうしたアイヌ民族との戦いの記録は、弘前藩で後世編纂された歴史書などにはほとんど記されることはなく、家臣の由緒書などに見られるものであった。津軽氏が大名としての存在基盤を誇示するためには、南部氏から独立を果たし、それが公のものとして認められたのだということを重点的に示す必要があったのであろう。そして、そうした津軽氏や藩の意向のもとでは、家臣の記憶にも深く刻み込まれていたであろう、アイヌ民族との戦いは一切記録に留められることはなかったのである。